本だな

「雲と風を読む」

中村和郎　著
岩波書店，2007年8月
165頁，1700円（本体価格）
ISBN978-4-00-007843-6

一読して，やっぱり自然地理の気象・気候分野は面白いと思った．気象学と自然地理の研究者は同じ自然現象を扱うこともあり，その現象をじっくりと観察する姿勢は同じだが，例えば，面白い形態の雲を見て，その雲に内在する物理法則に思いを巡らすのが気象研究者で，その雲の下で暮らす人間の営みに思いを馳せるのが自然地理研究者という違いがあると思っている．この本は自然地理研究者の手による雲と風の入門書であり，その平易な説明と穏やかな語り口により，気象学・気候学に馴染みのない学生や一般の方にも気軽に楽しんでもらえるであろう．

第1章と第2章は，雲の成因・分類などの雲の基本知識について書かれている．ここでは，北原白秋の「雲の歌」や「出雲風土記」などからの引用を通じて日本語の雲の呼称の多様性が論じられると思えば，エトナ火山の「風の伯爵夫人」やスカッド（scud：あのスカッドミサイルのスカッド）なども紹介されている．また，あの生物学者のラマルクが科学的な雲分類を試みナポレオンに叱られたことから始まり，雲分類の歴史についても概観されている．本の至る所で著者の博学ぶりが感じられる．

第3章と第4章では，小規模な風系と大規模な風系について紹介されている．最も規模の小さな風は，電車が作り出す地下鉄の構内に吹く風である．こんな風まで研究対象にしてしまう貪欲な発想が面白い．幾つかの局地風が紹介されているが，富山県の砺波平野に散在する「カイニョ（屋敷林）」の役割を再確認した話では，対象をジックリと観て考えることと足で稼ぐことの重要性を再認識させられる．総観規模の風やモンスーンの風も書かれているのだが，足で稼げる空間スケールの風が面白いだけに，影がやや薄く感じられた．

第5章では，気象衛星画像を使って視点を地上から宇宙に移し，雲と風の読み方の基礎が説明されている．これを足掛かりに，第6章と第7章では熱帯-亜熱帯域と中緯度偏西風帯を対象にして，宇宙と地上からの二つの視点で観た雲と風の読み方が論じられている．その中で，熱帯収束帯を例に，これまで地上からの視点で研究されてきた現象を宇宙からの視点で見直すことで，自然現象の理解が進むという著者の考え方が，そこはかとなく強調されている．熱帯-亜熱帯域における雲と風が作る乾燥域の多様性は，地理学の言葉を借りれば，乾燥域の植生帯と言う「景観」の多様性が，「景観」の構成要素である雲と風によって作られると言うことになろう．最近，モンゴルの草原を研究対象にしている評者は，中緯度の乾燥域における雨と植生の「景観相互作用」が書かれていないことが残念であった．これは高望みかも知れない．

第8章では時空を越えた「雲と風のロマン」が語られている．この章の冒頭にある熱帯の小島の上にぽっかりと浮かんだ積雲の話が，評者の一番のお気に入りである．コンチキ号でペルーからポリネシアに渡ったハイエルダール氏の漂流記を話の枕に，大昔の海洋の民が大海原の水平線に顔を出した積雲を見て，その下に存在する目には見えない小島を海の里程標にしていたかも知れないとロマンが語られている．もちろん，著者は慎重に書いているのであるが，このロマンに刺激された評者には，目をつむると，「あ，『島の雲』が見えとるでぇー」「あ，ホンマや．疲れたでぇー，ちーと，寄っていかんかぁ？」と，櫂を漕いでいた手を休め，『島の雲』を指さす海洋の民達の姿が見えるのである．

（群馬大学教育学部　岩崎博之）

© 2008　日本気象学会